

近世人の思想形成とメディア

若尾 政希

はじめに

今、日本の近世史研究において、思想や文化への関心がたかまつている。たとえば歴史学研究会近世史部会で「近世の政治支配と文化形成」「近世の国家・社会と文化動向」という大会テーマが掲げられたのをみても、それがわかるだろう。私のみるところでは、このような状況は突如として起こってきたものではない。一九九七年に私は『歴史学研究』誌上に次の文章を寄せた。「思想史研究がさかんである。研究者と論文の著しい増加は近年に特徴的なことに思われる。それ以上に顕著なのは、いわゆる思想史プロ

パーでない研究者が歴史を叙述するにあたって、かつては切り捨て見ようとしなかった人間の意識・思想を重視し始めたことである。いわば日本史研究の思想史化とでもいべき新しい潮流が起きている。新しい？、否、実は家永三郎氏が半世紀も前に述べていたこと——「いやしくも歴史的世界の全領域は、潜在的にもせよ思想を含まないではない」のであるから、思想史学は「あらゆる歴史的分科史の主体的側面を統括する位置に立つ」（『思想史学の立場』）——がようやく認められようとしているともいえる。しかしながらこの研究潮流がおそらくソ連・東欧崩壊後の思想状況と無関係ではないことを思うとき、その行く末には少

なからぬ不安を感じざるを得ない。唯物史観から自由になって、ことさらに「基礎構造が上部構造を制約しながら上部構造に基礎構造からは理解しえない要素がある」(家永氏)などと主張しなくても思想史研究を行い得るようになってきているのであるが、それでは思想史研究が何を求めどこに行こうとしているのかというと、まったく見えてこないのである⁽²⁾。ここで近年とは、一九九〇年以降である。私は、一九九〇年頃から日本史研究(近世史研究だけではない)の思想史化とでもいふべき状況が起きているのを実感していた。一〇年にわたって伏流していたものがようやく二一世紀になって、近世史研究が取り組むべき主題の一つとして表面に出てきたといえる。しかしながら、思想史研究が何を求めどこに行こうとしているのか、見えてこない。このような危機感を持って私は研究を行っている⁽³⁾。

1 思想史とは何か——総合史としての構え

専門は何かと問われたとき、私は日本近世史・思想史研究と答えることにしている。思想史研究というと、特異な分野のように見られるがそんなことはない。現代のことを考えてみても、現代がどのような時代かということを考えてみるときに、人々がどのようなことを意識し考えているのか

ということが分らないと、現代という時代は分らない。過去についても同じである。このような「人の意識・思想に焦点をあわせた歴史研究」を、私は思想史研究と呼んでいる。従来の歴史研究では思想史研究がなおざりにされ、人の息吹が感じられない人間不在の歴史叙述となっていたのではないか。こうした反省に立ち思想史研究を根幹に据え、個別分科史を総合する歴史研究を開始しなくてはならないと考えている。

ところで、思想史の総合史的役割に言及したのは、先述の家永氏である。家永氏は、思想史について、人間の文化現象の意識的な面を扱う広義の思想史と、狭義の文化の一つに含まれる思想を扱う狭義の思想史の二つの思想史を設定する。そして「単に狭義の思想に限定するのではなく、また「単に広義の思想を全部平等に取り入れるのでもなく、「狭義の思想を中核とし、広義の部分を周辺部とする、二重の同心円とでも云ふべき形態に於いて日本思想史の対象の領域を定めようと思ふ」と主張する。さらに、広義の思想史が「あらゆる歴史的領域にわたりその意識面を対象とするものとして、一切の分科史の主體的側面を統括する位置に立つ」として、思想史が総合史であると説得的に論じていくのである。

というわけで、私は、分科史を総合する総合史としての

思想史研究を開始しなくてはならないと考えている。その試みの第一歩が、拙著『太平記読み』の時代¹⁾である。思想史研究がさかんでありながら、関心と領域が専門化・個別分散化して、意識・思想のレベルから時代像を結ぶことがますます困難となってきた。このままでは、総合史としての思想史研究は自立できないという危機感をもちながらこの書を執筆した。「太平記読み」を基軸とした政治思想史の構想は、私の意図としては、分科史の一つとしての思想史の世界だけのものではない。政治史・社会史・経済史・社会運動史・文化史等々の分科史のすべてに関わるものであり、それらを統括する総合史の構想でもあったのである。

2 社会通念・常識という視角

人の意識・思想に焦点をあわせた歴史研究といっても、「ある人はこう考えていた」「別のある人……」などと個別事例のられつに終わってしまったのは、永遠に時代像を結ぶことはできない。では人の意識・思想に焦点をあわせて時代を読み取るには、どうしたらよいか。私が今注目しているのは、「社会通念・常識」という視角である。社会通念・常識は空気みたいなもので、誰もそれに疑問をさし挟

まない。人はともすれば常識にとっぴりつかり、それが普遍・不変であるかのように考えがちであるが、一歩その外に立って歴史研究者としてそれを考察の対象とするとき、現代の常識もその社会のなかで歴史的に形成された歴史的産物であることがわかる。我々がいわば身にまとってきた社会通念・常識に疑念を抱きそれを対象化してその歴史的由来を追跡するとき、我々は自身が「今」という時代の政治的社会的関係のなかに身を置く歴史的存在であることを自覚することができる。一個の歴史的存在としてどのような主体を形成（思想形成）すべきかという人生の切実の課題は、歴史を学ぶことによって達成することができる。この意味で歴史学は自己確立・自己変革の学問であり、ひいては政治・社会の変革の学問だと言えるのである。

社会通念・常識は変わるものであるから、それは時代を区分する指標になり得る。すなわち社会のなかで、人々が共有する常識が形成される時期からそれが常識として通用しなくなる時期までを、一つの時代としてとらえることができる。これまでも歴史学が取り組んできた時代の変革という課題も、この視角から問題提起し直せば、次のように言うことができよう。「ある時代、ある社会において人々が共有する通念なり常識といったもの（いいかえればその秩序を支えている通念・常識）がどのようにして形成されるのか。

またかつては疑いえないもの絶対的なものに見えた通念・常識がどのようにして通用しなくなり別のものにとって代わられるのであろうか、と。³⁾

3 社会通念・常識の形成と書物——なぜ書物なのか

「人の意識・思想に焦点をあわせた歴史研究」と、「人」と一口に呼んできたのであるが、日本の近世は身分上下の差別がはっきりと存在した社会であり、また同じ身分階層といえども上層と下層とでは大きな差異が認められ、また地域差も大きく、近世社会に均質な「人」がいたわけではない。よって我々が、近世人を研究対象にするときには、身分階層に応じた意識・思想の差異や、同じ身分階層の中での様々な差異、他の身分階層との関係意識を問題とする必要がある。と、同時に、注目すべきは、このような多様・多層な近世の人々の間に、意識・思想が共有されるという事態である。たとえば政治とはどうあるべきかということが、領主層から民衆にまで共有されるのはなぜだろうか。領主層から民衆までに共通の情報を伝える情報媒体の存在を抜いて、それは考えられないであろう。近世のはじめ、一七世紀は、この列島で初めて商業出版が成立し発展した時代であり、版本と写本とが流通し読まれ書写された

時代である。塚本氏によれば、知恵や情報の媒体として書物が世に普及していったのは、「十六世紀末以来の大きな変革であった」。そして、本来は書物とは関わらなかつた口誦による知（知恵・知識、村落指導者層が担うオーラルな知も、書物による知を受けたものへと変質していったという。⁶⁾

前述の「太平記読み」も、（遅くとも）一六一〇年代に世に出たときには、「読み・講釈」によるものであった。それは、武士のなかでも上層の領主層を対象にして、政治論・軍事論を真面目に語ったものであり、特に政治論では、「明君」としての楠正成像を造形することにより、あるべき領主「明君」像や政治のあり方を鋭く提起していた。この教えが、大運院陽翁やその弟子による講釈により、岡山藩主池田光政や金沢藩の前田利常に受容され、領主層が『理尽鈔』が説く民を恵む政治＝仁政という政治理念を自らのものとするようになっていった。ところが、この『理尽鈔』が、この時代に日本史上初めて登場した出版業者の手に渡り、一七世紀半ばに出版されると、『理尽鈔』は「都鄙貴賤此の書を信じ、世こそつて好み用いる」と評されたように、広範な層の読者を獲得して大流行した。『理尽鈔』もの、『太平記』ものの出版があいつぎ、一七世紀末には、民衆を対象にした大道芸能者太平記読まで登場し

辻講釈の盛行を迎える。ここで問題となるのは、『理尽鈔』がなぜ地域・身分を越えてもはやされたのか、政治・軍事論を要諦とする『理尽鈔』は民衆にとってどのような意味があったのか、ということである。河内国大ケ塚の富農・富商であった河内屋可正の『河内屋可正旧記』は、それを考える絶好の史料である。可正は『理尽鈔』やその関連書を通して、「明君」¹ 正成像を受容していた。「我等ご

ときの庶人」と自称する可正にとって、「太平記読み」は何であったのかというと、可正はまず、それを修身・齊家の論に読みかえ、子孫への教訓を展開している。と同時に、可正は、郷村の民を治める指導者として強い自覚を持ち、受容した「明君」² 正成像を自らのものとして、あるべき村役人像と仕置のあり方を説く。「太平記読み」の政治論は領主層だけでなく村役人層まで、いわば下降化し、その結果、武士層から民衆上層までに、共通の治者像指導者像が形成・定着したといえるのである。さらに可正は「夜話の折」に「軍書を引て和漢両朝の名将勇士のはたらき」から仏法神道歌道その他まで「取集めて」講釈をしていた。民衆の間に、村の読書人を中心にして、その読み語りを聞く場が形成されており、出版メディアによる知は、そうした村に形成されたオーラルなメディアを介し、中下層農民へと流通していった可能性もある。こうして私は、『理尽

鈔』が領主層から民衆にまで受容され、『理尽鈔』が提起する明君正成像や政治のやり方は、山鹿素行や熊沢蕃山ら当代一流の学者をも巻き込みながら、階層の差異を越えた当代社会の共通認識、すなわち社会の政治常識となっていたという仮説を提起したのである。

最近、私は「太平記読み」に限定せず『理尽鈔』を含めた「軍書」を考察の対象としているが、それはともかくとして、一七世紀末～一八世紀初頭の可正の事例から明らかに、民衆の思想形成に際しても子孫に教訓を残すときにも軍書が引かれている。また、一八世紀になると地域・村の歴史が編まれるが、その際にも軍書が参照される。さらに一八世紀半ばになると非常時の百姓一揆を描いた百姓一揆物語が日本各地で作成され始めるが、そこにも『理尽鈔』³ 『太平記』をはじめとした軍書が参照され利用されている。一揆物語に関して、特に興味深いのは、一揆物語が、「咄」し「語」られたものを聞き書きしたもの、あるいは「咄しの種」として書き留めたという体裁をとっている点である。一揆物語は口誦・講釈により作成・受容されたといえるのである。その作り手について、その口ぶりから講釈を飯の種としていた専門の芸人の存在を読み取ることもできるものもあるが、むしろその多くは、村・町の住人自身によるものと推定される。村・町のなかで民衆自身

が茶・酒を飲みながら咄し語る場が存在しており、『理尽鈔』『太平記』をはじめとした軍書に通じた人物が村・町にいたことはすでに指摘したところだが、そうした人物により一揆物語が作られ周辺の人々に咄し語られたのではと推定されるのである。「太平記読み」と同じく、在村・在町の知識人・読書人が担うオーラルなメディアによる知の回路のなかで、一揆物語は成立し受容されていった。こうして近世を通じて軍書が再生産され続けるのである。

4 安藤昌益の思想形成と書物

私が卒業論文以来、一貫して取り組んできたのは、安藤昌益である。一八世紀の日本になぜ昌益のような思想家が出てきたのか、この謎に挑むことから私の研究は始まった。昌益は、経歴が不詳のため誰に師事して学問を学んだのかわからない。またどのような書物を読んで学問を学んだのかわからない。ところが、当然のことながら昌益は読み書きの基本的な教育やながしかの医師の手ほどきは受けたはずであり、いくつかの書物を読んだはずである。よって昌益がどこでどのような教育を受けたのかという伝記的事実の発掘作業を行うとともに、それと並行して、昌益が残した著作類の語句を詳細に分析することによって、昌益が

どんな書物を読んだのか確定していかなければならない。昌益の著作を見ると、昌益は既成の学問を厳しく非難・否定しており、諸学問についてながしかの知識をもっている。どうやってその知識を入手したのか、昌益自身は語っていないものの、何らかの情報源があったはずである。そこで昌益の表現の一言一句に注目して、それを昌益が見ることが可能であった書物と比較対照する作業を根気強く積み重ねることによって、昌益が確かに読んだ書物を明らかにできる。昌益の読書歴を解明できれば、昌益がその書物から何を学んだのか、何を継承し何を否定していったのかという昌益の思想形成の過程を考察することができる⁹と考えたのである。

私の書物への関心は、卒論を書き始めた一九八二年以来、今日まで一貫している。書物の歴史学的研究というと、しばしばフランスの社会史研究者ロジェ・シャルチエ（『読書と読者』¹⁰）の影響を指摘されるが、私自身は少なくとも自覚的には影響を受けていない。シャルチエと私の研究が似ていると人から言われ、気になって読んで、確かに似ていると思ったことはあるが、それはともかくとして、私は、一九八〇年半ばから歴史学のいろいろな研究会に出るようになったが、たいてい、大きな疎外感を味わわれた。史料論や史料保存論でとりあげられるのは手書きの文書史料

であり、書物が話題にされることはまったくなかった。各地で史料調査が行われ、文書の整理、目録の作成、史料の保存がなされてきたが、ここでは文書史料のみが重視され、書物はなごらく、目録の「雑」の部に入れられ分析の対象となつてこなかった。なぜ書物が「雑」なのか、なぜ書物が史料として扱われないのか、私がやっていることなどは、歴史学においては価値がないことなのかと自問し、肩身の狭い思いをすることもしばしばであった。ところが、九〇年代に入ると、書物に光があてられるようになり、書物に着目して書物を史料として近世史を語ろうとする研究動向が出てきた（『歴史評論』六〇五号、特集「書物から見える日本近世」参照）。現在の近世史研究は、文書史料に加えて、書物をも組み入れて歴史を叙述できるレベルに到達している。ではあるが、不満がないわけではない。なぜなら書物の内容までをも踏まえた研究は少ないからである。前述の青木氏は『浮世風呂』、横田氏は『徒然草』の内容を分析しているが、こういった研究はまだ少数に過ぎない。いうまでもなく書物には、思想性があり、よつて政治性を持つ。書物の内容・思想分析を行い、思想性・政治性を明らかにするような研究を行う必要がある。そのレベルまで研究を引き上げることができてはじめて、書物が思想形成・主体形成にどのような意義を持ったのかを解明することができる

であろう。このような問題意識から、私は書物の思想・内容の分析を踏まえた「書物の思想史」を提起したいと思う。

5 思想形成を問う思想史

こういうと変に聞こえるかもしれないが、私は昌益を通して思想史研究について数多くのことを学んできた。昌益はその学問修得の過程等がまったくわからないために、私は昌益の著作の語句にこだわり、その語句を載せた書物はないかと探索し、いろいろな書物を読まざるを得なかった。もし、昌益に挑まなければ、音韻学とか本草学、医学、曆学、そして「太平記読み」等々に私が関心を持つことは決してなかったであろう。今にして思えば、昌益が読んだ書物を読み、昌益が学んだ学問を学ぶことを通して、私はいわば昌益の思想形成過程の一端を追体験していたのかも知れない。

昌益が読んだ書物を掘り起こすことによつて、昌益がその書物から何を学び、何を否定していったのかを考察することが可能になる。そうした作業の積み重ねにより昌益の思想形成を跡付けていくと、ぎりぎりのところで昌益が時代や社会といかに切り結んでいるのか、その葛藤の実像が見えてきた。昌益の時代や社会との葛藤をえぐりだすこと

を通して、いわば昌益からみえる日本の近世を描けることが分かったのである。経歴も修学過程もまったく謎の思想家・昌益を研究対象に選んだ故に、このような大変な作業が必要になったのであるが、結果的には、これが幸いした。なぜなら、従来の思想史研究が往々にして、思想家やその著作（作品）の思想的基盤を明かすことなく、したがってその思想形成過程を説明することがないまま、行われていることに気づくことができたからである。こうして、あらゆる思想家、あらゆる作品の歴史的位置を模索するに際して、昌益研究で行ったような基礎作業が必要だとの確信を持つに至ったのである。

私は、ここで「思想形成という視角」からの思想史研究の重要性を提起したい。こういうと、思想形成過程の解明が思想史研究の基本であるのは当然ではないか、何をいまだらという批判が返ってきてきそうであるが、実は今こそ声を大きくしてこれを言わねばならない。冒頭にも述べたように、思想史研究が盛んとなり日本史研究の思想史化とでもいべき潮流が起きているが、他方では、思想史研究が何を求めどこに行こうとしているのか、まったく見えてこず、研究の個別分散化が極度に進んでいるのが、思想史研究のおかれた現状である。歴史学としての思想史研究は、今こそ基本に戻って、対象となる人物の思想形成の過程を丹念

に跡づけ、その人物の時代や社会との葛藤をえぐりだすことを通して、時代や社会を描く作業を行わなければならないのである。

附記 本稿は、二〇〇三年度大会シンポジウムにおける報告原稿を縮めたものである。なお、本報告を踏まえ執筆したのが、拙著『安藤昌益からみえる日本近世』（東京大学出版会、二〇〇四）の「序」である。御覧いただければ幸いである。

注

- (1) 家永三郎『日本思想史学の方法』（名著刊行会、一九九三）に所収。
- (2) 拙稿「書評 倉地克直『近世の民衆と支配思想』」「歴史学研究」六九九、一九九七。
- (3) 近世日本思想史研究に関する研究史整理を行った、拙稿「近世思想史研究の視座」『展望 日本歴史 近世の思想・文化』東京堂出版、二〇〇二、を参照のこと。
- (4) 『太平記読み』の時代―近世政治思想史の構想― 平凡社選書、一九九九。
- (5) 塚本学氏も「前代人の常識について、現代の常識からの思いこみを離れて考えていく道が、ひらかれていくことを期待したい」と指摘している。「江戸時代人の常識」『日

- 本歴史』六二〇、「歴史手帖」、二〇〇一、を参照。塚本氏の動物観・肉食観に関する仕事はいずれもこのような視角から前代人の常識を問うたものといえよう。塚本学『動物と人間社会』『日本の社会史』岩波書店、一九八七、同『肉食の論理と異人感覚』『近世再考―地方の視点から―』日本エディタースクール出版部、一九八六。
- (6) 塚本学『生きることの近世史―人命環境の歴史から―』平凡社選書、二〇〇一。
- (7) 木村茂光氏監修の『大平村古記録』（沼津市史叢書七、沼津市教育委員会、二〇〇〇）や、岩橋清美氏の『旧記』の研究を参照のこと。岩橋清美『近世における地域の成立と地域史編纂』『地方史研究』四六一五、一九九六、同『近世社会における『旧記』の成立』『法政史論』一九、一九九二、等。
- (8) 拙稿「百姓一揆物語と『太平記読み』」岩田浩太郎編『民衆運動史』二、青木書店。
- (9) こうした方法による研究を集大成したものとして、三宅正彦『安藤昌益と地域文化の伝統』（雄山閣出版、一九九六）がある。
- (10) ロジェ・シャルチエ『読書と読者』みすず書房、一九九四。

(一橋大学助教授)